

のきがわら へんせん
軒瓦の変遷

市内各地出土 飛鳥時代～室町時代（7世紀～16世紀）

建物に瓦が葺かれたのは我が国最初の本格寺院として建てられた飛鳥寺で、
7世紀後半から8世紀には藤原宮や平城宮の宮殿にも瓦が葺かれました。軒先
を飾る軒丸瓦には蓮の花を上から見た蓮華紋、軒平瓦には唐草紋がつけられ、
使われた寺や宮殿によって文様が異なります。百済の影響を受けた素朴な飛鳥
時代のものから、立体感のある力強い白鳳時代（7世紀後半）、整った奈良時代、
平板な平安時代のものへと蓮華紋も時代によって変化していくことが分かりま
す。周囲を飾る連珠紋は、遠くペルシャにその起源がある文様です。



飛鳥時代 軒丸瓦



白鳳時代 軒丸瓦



奈良時代前半 軒丸瓦



奈良時代後半 軒丸瓦



平安時代末 軒丸瓦



室町時代 軒丸瓦

水の渦巻きがその起源とされる巴紋は、平安時代に軒丸瓦の文様に取り入れ
られ、現在に続いています。戦国時代に現在の若草中学校の地にあった多聞城
で城に初めて瓦が葺かれたとされるのも、大寺院があり、瓦作りの技術が奈良
にあったからだと考えられます。寺院や城に限られていた瓦が民家にも多く用
いられるようになるのは、江戸時代後期（18世紀後半）以後のことです。